

第1761回（9月8日）

グローバリゼーションとアジア小農業

（アジア農民交流センター）大 野 和 興

日本農業新聞に、約10年間勤務した経験を生かして、現在フリーのジャーナリストとして、アジア各地の農村へ取材活動を繰り広げている。アジアの農村を見てゆくなかで、最終的に日本の農業や農村を理解することにつながると考える。

アジアは、東北タイとフィリピンネグロス島へよく出かけている。東北タイでは、規制緩和による豚価の暴落のため、養豚農家が消滅するということが起きた。また、カシューナッツの栽培や養蚕等も政府の奨励で始められたが、カシューナッツが実をつけなかったり、中国から安い絹が入ったりし始め、農民に借金が残されるだけとなる。タイにおいても、二桁の経済成長となり、建設ラッシュや列島改造が始まる。一方で農村では政府の奨励した農業生産が失敗に終わり、しわよせは農民へという構図が、カシューナッツや養蚕ばかりでなく、牛やキャッサバの生産にもおよぶ。90年代には、都市への労働力の集中、伝統的な小農業の衰退が起きる。

フィリピンネグロス島では、関連産業を含め砂糖きび農業で生活している人が多く、前近代的なプランテーションのため、WTOでの関税引き下げによる自由化競争に敗北した。政府による農地改革が進まない中で、アグリビジネス的な土地所有が進行し、グローバリゼーションの波が押し寄せている。政府の農業計画では、米やトウモロコシのような主食を生産する農地を減らし、輸出用換金作物と畜産のための農地を増やすとしている。しかし、現状では国民の大多数は、米を十分に食べられるような状態ではない。

このようにアジアでは、伝統的な農業が消滅しかかっている。しかし一方で地域の資源をうまく使いながらの循環的農業の生き残り

もみられる。ふり返って日本農業は、大規模経営が一番苦しい立場に置かれている。現在のグローバリゼーションの中で、極論すれば産業としての日本農業は考えられないのではないか。人々の生き方、食べ方も含め社会全体の中で、農業をとらえ直す必要がある。国際競争、自由競争に勝ち抜く農業でない、これまでの延長線上でない、別の農業のあり方があるのではないだろうか。

（質問）グローバリゼーションをどのようにとらえているのか。

（回答）商品にしてはいけない物まで世界市場を舞台にした商品にしてゆくやり方である。また、すべての物をグローバルスタンダードで切ってゆくやり方でもある。例えば、有機農業は地域性があって成り立つものであり、グローバルスタンダードとは、あいまいな。

（質問）途上国に対するボランティア活動は、別の意味のグローバリゼーションではないのか。

（回答）途上国の農民が主体となった活動でなければならない。その意味で懐疑的にならざるを得ない面もあり、またボランティアの介入なしでやれそうなところは、貧しくても入るべきでない。

（質問）日本のNGOとODAは、溝が大きい、この溝をうめる方法はあるのか。

（回答）ODAのあり方などについて、NGOとGOとの対話が進みつつある。

（質問）生産物の流通は、どのようなになるのか。

（回答）地場流通を中心とする。貿易の場合は、オルタートレード（民衆交易）という方法もある。

（質問）アジア小農業の疎外される中で、農業の発展の道筋はあるのだろうか。

（回答）難しいが、どういう農業の発展の方向があるのか考えてゆかねばならない。

（文責・石橋喜美子）